

# 全国の遺児支援「あしなが学生募金」

## 求む参加ボランティア

### 30年で団体8割減 募金額も減少

昨年10月、青森市で行われたあしなが学生募金関係者は、遺児の現状を知ってほしいためにも、多くへのボランティアに参加してほしいと訴えている。

あしなが学生募金参加団体数と募金額の推移(全国・秋)



病气や災害、自死などで親を亡くした子どもたちを支援する「あしなが学生募金」に参加するボランティア団体が減っている。1987年には全国で約4600団体が参加していたが、昨年は983団体と30年で8割も減った。本県で奨学金を受けて勉学に励む若者も協力団体の減少を感じており、「ボランティアが減ることで、遺児たちの現状を知ってもらう機会が失われてしまう。遺児を支える募金額が減少する」と危機感を抱く。

(菊谷賢)

50年前に始まった学生募金は、奨学金を受けている学生のほか、中学生や高校生らのボランティアが毎年春と秋の2回、募金を実施している。集まったお金は、病气や災害、自死で親を失った子どもたちの奨学金、1億1500万円より32

00万円(28%)減った。あしなが募金の周知不足や少子化のほか、アルバイトなどで高校生が忙しくなっていることが、参加団体減少の要因として挙げられている。

本県では昨年10月、青森と弘前の2カ所で募金が行われ、参加団体は大学が15団体、個人・一般1の計56団体。集まった募金は約56万円だった。

これまで5回募金活動に参加した八戸学院大学4年の市川洋幸さん「学生募金事務局東北エリア局次長は「一年々参加団体は減っている印象がある。育った環境の違いによって教育格差が生まれないように活動に協力してほしい」と呼び掛ける。

小学生の時、父親を病気で亡くした弘前学院大学2年の工藤大和さん「学生募金事務局青森ブロック代表は「奨学金のおかげで今の自分がある。学生募金のことを多くの人に知ってほしい」と語った。